

# The Power of Re-Creations: A Consideration of the Interaction between Stories and Readers in J. R. R. Tolkien's Works

渡邊, 裕子

<https://hdl.handle.net/2324/4784372>

---

出版情報：九州大学, 2021, 博士（文学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 渡邊 裕子

論 文 名 : The Power of Re-Creations: A Consideration of the Interaction  
between Stories and Readers in J. R. R. Tolkien's Works  
(再創造の力 : J. R. R. Tolkien 作品における物語と読者の相互作用に  
関する考察)

区 分 : 甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀イギリスの言語学者兼作家であり、中つ国という架空の世界を舞台とする独自の神話体系を創造したことで知られる J. R. R. Tolkien(1892-1973)の物語作品を扱い、そこにみられる、「読者」と「物語」の間の相互作用の性質を、「再創造」というキーワードを用いて明らかにするものである。Tolkien の創作には二つの再創造が窺える。第一に、その創作技法において、既に完成させた自身の作品であれ、北欧神話などの既存の物語であれ、それら物語を新たな視点で書き直すことで新しい物語を生み出していたこと、つまり、作者自身が物語の一受容者として、元となる物語を解釈し直し、既存の物語を新しい物語に再創造していたことである。第二に、自身の物語観を表明したエッセイでの物語の機能に関する説明をはじめとし、作品に共通して、物語経験を通じ読者が自身の持つ世界像をより肯定的に再創造するというテーマがみられることである。Tolkien の創作には、このような方法論としての再創造とテーマとしての再創造が窺えるが、作品においては、これら二つの側面が物語と読者の相互作用として関連しあって機能することが描かれている。彼の作品の多くにおいて、読者的に機能する登場人物達は、物語を経験する時、そこに自身の世界観を持ち込むことで、それら物語を解釈し直し、自分なりの一種の新しい物語を生み出す。特徴的なことは、その過程で再考されるものが、単にその物語の意味ではなく、物語を解釈する際に読者達が無意識に持ち込んだ自身の価値観であるという点である。こうして、ある物語を、読者自身の文脈によって読み直す時、同時に読者は自身の世界観をも再検討することとなる。Tolkien 作品においてはこのような2つの再創造の繋がり（読者による物語の再創造及び、再創造された物語による読者の世界観の再創造）のモチーフが繰り返し描かれており、それを明らかにするのが本論文の目的である。

このように、再創造というキーワードによって作品を検討する時、従来の Tolkien 研究における限界を克服し、読書体験の性質という、作品受容における根本的な問題の一つに光を投じるこ

とができる。従来研究は、作者の創作技法に焦点を当てた方法論（特に作者が元にした出典の特定と、それをどう改作したか）と、個々の作品のテーマ論（現代的な問題がどのように扱われているか）に二分される傾向にあった。各議論はそれぞれ有効だが、分断された状態で論じられることが多く、結果、方法論は、出典とされるものの有効性を指摘するだけに留まり、テーマ論は、当該のメッセージが、どのような方法でより効果的に伝達されているかの視点をしばしば欠く。一方で、上記で述べたように、方法（物語の改作）とテーマ（現実世界にみられる問題の再考）は有機的に結びついており、これを再創造という一つのキーワードの下でまとめて議論することで、作品を全体として捉えることが可能となる。更に再創造という概念の導入は、Tolkien 研究に読書体験の考察という根本的な視点を導入することにも繋がる。Tom Shippey など、上記の二つの議論を密接に関連付ける数少ない研究者においても、作品全体に通じる、物語と読者の関係性に着目した議論は十分になされていない。しかし、作品の多くにおいて、読書体験に相当する経験が登場人物達を通じて描かれており、ここに焦点を当てることで、読書行為が我々読者にとって持ち得る意味を理解する一助になるのである。このように本論では、Tolkien 作品において、読者に相当する人物の介入によって既存の物語が如何に再創造されているのか、及びその再創造の行為がどのように彼らの日常世界の捉え方を再創造しているのかを論じることで、作品を全体として捉え直すと共に、読書体験の根底にあると考えられるものを意識化する。

本論は5章構成である。1章では *The Hobbit*(1937)を考察し、現代的な読者の価値観を代表する主人公と語り手によって予め決定づけられていた、ドワーフ族が体現する古い叙事詩的価値観を批判的に読む読み方が、徐々に訂正され、二つの異なる価値観を調和させた読みの再度の実践により、ドワーフの叙事詩の意義が再創造され、結果主人公自身の日常を捉える価値観をも肯定的に変質させていることをみる。2章では *The Lord of the Rings*(1954-55)において、読者の代表となる人物達を通し、作者自身の神話作品 *The Silmarillion*(1977)の新たな読みが提供されると共に、そうして再創造された神話作品と読者の繋がりが明示され、その神話をモデルとすることで、読者が抱える日常の問題への新たな向き合い方が提起され得ることを確認する。3章では、創作に関する寓話“Leaf by Niggle”(1945)において、読者と物語の相互の再創造の理論モデルを再確認する。4章で扱う“Smith of Wootton Major”(1967)では、これも一種の寓話として再創造の理論が確認されると共に、読書体験の目的が、読者が自身の日常を肯定的に捉え直すことであることが改めて強調されていることをみる。5章では、世界の創造を扱った神話作品 *The Silmarillion* において、人間が、世界という一つの物語を、自分の限られた理解力で解釈し、自分達自身の物語に再創造することが、そのまま世界のあり方を再創造することに直結していることを論じる。以上5つの章で確認する読者と物語の相互作用により、読者が物語と対峙する方法、また物語の享受により、読者が日常を生きる為の力を再度獲得する方法が明らかになるのである。